

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：37503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370845

研究課題名(和文) 『遼史』地理志の研究 出土資料と实地調査に基づく

研究課題名(英文) A Study of the Dilizhi of the Liaoshi: Based on Excavated Materials and Field Research

研究代表者

吉本 智慧子 (YOSHIMOTO, Chieko)

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・教授

研究者番号：70331105

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：2012年以降の契丹文新資料の増加、研究の深化を踏まえ、『遼史』において最古の原資料を反映し、研究上の問題点も山積している地理志を批判的に再検討した。中国内蒙古自治区東部・遼寧省西北部・河北省北部における遼代契丹文・漢文石刻資料の収集と考古学的現地調査によって獲得された知見を活用することによって、単なる文献学的研究ではなしえない地理志の再構築を達成した。

研究成果の概要(英文)：Based on an increase of new materials in Khitai script and deepening of study after 2012, this research project critically reexamined the Dilizhi of the Liaoshi which reflects the oldest original sources and has many problems for study. The project successfully produced a reconstruction of the Dilizhi, that could not be achieved only by text study, by using new knowledge attained through collection of stone inscribed materials in Khitai script and Chinese letter and archaeological field research in eastern Inner Mongolia, northwestern Liaoning province, and north Hebei province, China.

研究分野：人文学

キーワード：上京道 東京道 室韋王府 烏隗于厥部 拔里氏国舅大小翁帳 遙輦帳 契丹横帳季父房 契丹初魯得氏族

## 1. 研究開始当初の背景

『遼史』地理志は『遼史』116巻のうち5巻を占め、遼代行政地理研究の最重要史料である。しかし地理志の排列には明確な統一の体例がなく、原資料の引用も選別が不十分で、統轄関係の推移や州県建置の制度的沿革に対する記述を欠き、遼代行政地理の時間的・空間的全貌の理解を困難にしている。『遼史』地理志には少なからぬ孤立的で一次的にしか出現しない記事があり、その史料的來源の独自性を示す。これらの史料は往々にして本紀・列伝や出土史料と矛盾する。たとえば、

慶州條「遼国五代祖勃突」。太祖紀の記述によれば、勃突は太祖の四代祖(肅祖)の父頰頡に相当するが、契丹文墓誌は肅祖の父が石里董毗牒であることを明記し、頰頡なる人物は存在しない。毗牒の名は勃突とも合わない。豊州條「本遼澤大部落、遙輦氏僧隱牧地」。契丹文墓誌の解説と考古学的現地調査によって証明された遙輦可汗本帳の所在地が豊州東南の武安州(今の敖漢旗)境内に属するという事実と矛盾する。地理志と重要な関係をもつ旧『遼史』の部族志(今の『遼史』は部族志を嘗衛志に分散収録している)は、ほかの歴代正史になく、契丹各部族の分地の所在を研究するための最重要史料である。地理志の記述は南面の州に偏重し北面については不十分である。これは部族志によって補充しうるが、部族志にも大量の孤立した一次的にしか出現しない記事があり、出土資料と考古学的調査によるさらなる実証を要する研究対象となる。

『遼史』成書ののち、元・明を経て清代に至り、その訛誤や疎漏が学界の関心を集めるようになった。『遼史』地理志を補正する作業も始まった。清代前期の研究の特徴は、元代に編纂された『遼史』が使用しなかった史料を博搜して内容を増補することにある。厲鶚『遼史拾遺』24巻の第13~15巻は『遼史』地理志に専ら言及し、ついで楊復吉『遼史拾

遺補』5巻も『遼史』地理志に多く言及している。清末の李慎儒『遼史地理志考證』は主に元・明・清三代の方志の記述を博搜した『遼史』地理志研究の集大成である。清代輿地学の興起は『遼史』地理志研究を大きく促進したが、20世紀以降は考古学的現地調査を文献の記述と結合する研究方法が、遼代地理研究の主流となった。20世紀後半の考古学的発掘の進展は、『遼史』地理志研究に豊富な実証資料をもたらした。とりわけ21世紀以降の契丹文字解読の飛躍的発展は、従来の漢文史料に視野を限定した研究に別天地を開くものであり、契丹文字の記述を用いて『遼史』地理志を補正することは、先行研究を超越する重要な手段としてすでに初歩的な成果を獲得している。

出土資料を運用し『遼史』地理志を訂正増補する重要な意義は以下の二例によって証しうる。宋代文献『地理叢考』・『北蕃地理』には穆州(睦州)はあるが成州はなく、『契丹国志』州県載記・『遼史』地理志には成州だけが見えて睦州が見えない。このため、学界は一貫して睦州が成州に改名し、二州の州址は同一の場所であるとしてきた。ところが2004年に出土した『蕭琳墓誌』には睦州の方位が明記されており、睦州・成州の州址が同一地点ではなく、蕭琳墓地の東北にある酒局子村古城址が、睦州の所在地であることが証明された。一方、成州故址は今の遼寧阜新県西北五十里の西紅帽子村にあり、金同昌県里墩碑が出土している。②『遼史』地理志武安州條に「有黄柏嶺、曩羅水、箇沒里水。」とある。武安州城址を確定する証拠は、1990年に敖漢旗金廠溝梁鎮姚家溝で出土した『耶律元寧墓誌』である。墓誌には墓主が「黄柏嶺之東原」に帰葬されたとあり、墓地の北約3kmが教來河の河源である。ここから教來河が曩羅箇沒里(潢水)であることがわかり、それによって、墓地の北約20kmの遼代城址遺跡が武安州の所在地にほかならな

いことが証明される。

『遼史』地理志5巻は、遼五京的建置の順番で五道を排列している。しかしながら遼代には「道」という行政区画はなく、いわゆる「五京道」は唐代の表現を借りて編集の枠組みとしたものに過ぎない。従って「道」を用いて遼朝の行政区画を排列することは、決して妥当ではない。本研究は嘗衛志に引く旧部族志の序列を採用し、「太祖二十部」および皇族四帳、国舅族五帳、遙輦可汗九帳、奚可汗五帳それぞれの領地の順序で研究を進める。こうした研究の長所は、第一に出土墓誌の記述に適合することであり、第二に各氏族領地の異なった時期における歴史的沿革を反映することである。実際のところ、こうした独創的な研究方法はすでに実地考察において成果を獲得している。2012年、研究代表者は内蒙古敖漢旗から出土した契丹文『耶律玦墓誌』を解説し、墓主が遙輦氏鮮質可汗の八代目の子孫であり、墓葬所在地が遙輦氏の発祥地であることを確認した。この成果の中国語版を敖漢旗人民政府に提供したところ、「契丹発祥地解明のカギ」として重視され、中国新華社をはじめ60社以上の中国語メディアも同年11月に「契丹発祥地発見」として大々的に報道し、21世紀契丹学の重大な発見が広範な関心と反響を引き起こした。同年11月29日、内蒙古新州博物館は学術顧問として研究代表者を招聘し、敖漢旗人民政府は考古学的調査のチームリーダーとして研究代表者を特別招聘し、日中共同で契丹発祥地の全面的解明を進めることについて合意に達した。2013年8月に研究代表者が敖漢旗境内を調査した際に、遙輦九帳可汗中の二帳（鮮質可汗と耶瀾可汗）の本帳所在地を確認するという重大な成果を収めた。

従って、本研究では、2013年3月までに出現した契丹文字資料に基づき統計し得た最新の数値による契丹大字1028字（異体字を数えない）のうち839字及び契丹小字345

字（異体字を数えない）のうち310字の解読を達成している成果を踏まえ、いままで出土した契丹文墓誌に見える地理志関連の記述を検討すると同時に、新出契丹文・漢文の墓誌資料を引き続き収集・解読する。これは、『遼史』地理志に遺された諸問題の解明に、必ずやより多くの成果をもたらすことが期待される。

中国では2010年までに三回の文物普查（文化財全面調査）が行われているが、多くの新発見の墓葬や遺址は現在に至るも公刊された書物には記載されていない。研究代表者は近三年の科研費研究課題の遂行において一部の契丹文墓誌と関係する普查資料に接したが、さらに多くの資料については中国の文物考古機関と学術交流を進めた上で、情報交換の目的を達成することができる。このため、本研究は研究代表者が中国で墓誌資料を収集し、考古学的現地調査を行うと同時に、国際シンポジウムを招集する形式で中国側の協力機関と適宜学術交流を進め、より多くの普查資料獲得を期するものである。

以上の作業を基礎として、『遼史』地理志の全面的な検討・再構築を行い、最終的には、「『遼史』地理志新研究」と題する成果報告書をまとめる。本研究の結果、文献史料の局限を超える契丹帝国の地理的形式を復元するための研究基盤が提供され、その成果を学界や一般に発信することによって、東ユーラシア史の全般的理解に、大きな変容をもたらすものとなる。

## 2. 研究の目的

研究代表者は、平成23～25年度科研費研究課題「『遼史』の再構築 契丹文墓誌を主資料として」において、『遼史』世表・皇族表・外戚表および列伝・嘗衛志の一部に対する研究を進め、その成果の一部を『新出契丹史料の研究』（松香堂、2012年）として上梓した。公刊後の新資料の増加、研究の深化

を踏まえ、今回は、『遼史』において最古の原資料を反映し、研究上の問題点も山積している地理志を対象とする。中国内蒙古自治区東部・遼寧省西北部・河北省北部における遼代契丹文・漢文石刻資料の収集と考古学的現地調査によって獲得された知見を活用することによって、単なる文献学的研究ではなしえない地理志の再構築を目指す。

### 3. 研究の方法

本研究が採用する研究方法は二つある。第一は出土文字資料と『遼史』地理志の記述を対比することであり、出土資料は契丹文墓誌と漢文墓誌を主とする。第二は考古学的現地調査と『遼史』地理志の記述を対比することであり、現地調査は墓誌に記載された方位に依拠する。この二つの方法は相互に実証しあい、またともに『遼史』地理志に存在する訛誤や疎漏の補正に重要な根拠を提供する。これらを結合して運用したことにより、めざましい結果を獲得することができる。多くの古城址は地表の遺物や所在的の地理方位のみを根拠として大まかに推定されるだけで、出土文字の証明が欠如している場合は、往々にして異なった認識をもたらす。このため、古城址を確定するのに重要な価値をもつ出土文字資料の収集、および墓誌の記載する遺跡の方位を根拠として現地調査を行うことは、本研究における従来の研究とは異なった特徴的な研究方法である。

### 4. 研究成果

#### 【平成 26 年度】

平成 26 年度においては、以下のような作業を進めた。

契丹建国前後における奚人の活動中心とされる中国河北省北部を流れるラン河流域及びそれと地域的に繋がる内蒙古自治区南部を流れる老哈河流域に調査の重点を置き、かつて遼代の中京道と南京道に所属した東

西奚の遺址及び遙輦帳所在地に赴いて実地踏査を行った。

遼代の武安州遺址・降聖州遺址・永州遺址・豊州遺址及び横帳季父房の本帳所在地・契丹初魯得氏族の本帳所在地・契丹蔑古乃氏族の本帳所在地を訪れ、実地踏査を行った。以上の作業によって、遼中京大定府・南京析津府所轄範囲内の奚・契丹の関連遺跡の地理的・考古学的所在状況について豊富な知見を獲得し、次年度の研究の基礎を築くことができた。

#### 【平成 27 年度】

平成 27 年度においては、以下のような作業を進めた。

フルンボイル盟、ヒンガン盟ほぼ全域に遺された契丹遺跡を実地踏査し、あわせて遼金時代の墨書と石刻遺跡を調査した。

遼寧省北部における契丹拔里氏国舅大翁帳の本帳所在地において現地調査を行った。

中国・ロシアの辺境におけるアムール川とアルハラ川との合流点に赴き、実地調査を行った。

以上の作業によって、遼の上京道東部、東京道西南部所轄域内及び東京道室韋王府と烏隗于厥部所轄域内の契丹関連の遺跡に関する地理的、考古学的所在状況について豊富な知見を獲得し、次年度の研究の基礎を築くことができた。

#### 【平成 28 年度】

平成 28 年度においては、以下のような作業を進めた。

内蒙古自治区東部における契丹古城遺跡と二院皇族の墓誌出土地に対する実地調査を行った。通遼市所在の内蒙古民族大学の要請によって「契丹国の文化体制上の二重構造」の演題で講演を行った。

遼寧省北部の山岳地帯に赴き、新発見の横帳季房・国舅大翁帳・国舅小翁帳の墓誌出土地及び遼代の豪州遺址・遼州遺址を訪れ、実地踏査を行った。

河北省青龍県における新発見の遼代墓葬及び通遼における新発見の龍化州遺址の出土物について研究を行った。

以上の作業によって、遼の横帳・国舅帳所轄地域内の関連遺跡、河谷に関する地理的、考古学的所在状況について豊富な知見を獲得した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計11件)

吉本智慧子「遼史・契丹言語文字研究の新成果(下)」、査読有、『立命館文学』654、1-32頁、2017。

吉本智慧子「遼史・契丹言語文字研究の新成果(上)」、査読有、『立命館文学』653、1-39頁、2017年。

吉本智慧子「国舅大翁帳『烏里衍詳穩墓誌銘』」、『金光平先生逝去五十周年記念文集』査読無、97-102頁、2016年。

吉本智慧子「国舅小翁帳『白斯本相公墓誌銘』」、『金光平先生逝去五十周年記念文集』査読無、83-96頁、2016年。

吉本智慧子「横帳季父房『大中央胡里只契丹国故礼賓使墓誌銘』」、『金光平先生逝去五十周年記念文集』査読無、70-82頁、2016年。

吉本智慧子「契丹小字の創製者：雲独昆迭烈哥及びその後裔」、査読無、『喀喇沁博物館』1、1-5頁、2015年。

吉本智慧子「契丹文墓誌に見える遼朝北辺部族名 - 「萌古得」を中心に」、査読無、Memories of the Khitai Language and Culture Research Center, 8、1-10頁、2015年。

吉本智慧子「「木葉山」の契丹語源 - あわせて「土河」と「黄河」を論ずる」、査読無、Memories of the Khitai Language and Culture Research Center, 7、1-15頁、2015年。

吉本智慧子「大中央胡里只契丹国」、査読有、『立命館文学』639、1-50頁、2014年。

吉本智慧子「奚可汗世家的成立基礎：特隣可汗帳嗣墓誌研究之一」、査読有、『東北史研究』3、1-15頁、2014年。

吉本智慧子「契丹女子の命名習俗に関する再考察」、査読有、『立命館文学』638、1-30頁、2014年。

〔図書〕(計3件)

愛新覚羅烏拉熙春(吉本智慧子)、吉本道雅(共著)『ロシア・アルハラ河畔の女真大字墨書 女真・契丹文字遺跡をたどって』、280頁、朋友書店、2017年。

吉本智慧子『契丹大字辞典 - 金光平先生逝去五十周年を記念して』、658頁、平成20年度～22年度科研費補助金基盤研究(C)「契丹語辞典の編纂」(課題番号20520403)研究成果報告書、2016年。

愛新覚羅烏拉熙春(吉本智慧子)、吉本道雅(共著)『大中央胡里只契丹国 遙輦氏発祥地の点描』、383頁、松香堂、2015年。

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

吉本智慧子 (YOSHIMOTO Chieko)

立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・教授

研究者番号：70331105